

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	26220001	研究期間	平成26(2014)年度 ～平成30(2018)年度
研究課題名	人・車両・異種インフラのマイクロモジュール連携による超分散型時空間情報集約機構	研究代表者 (所属・職) <small>(平成31年3月現在)</small>	東野 輝夫 (大阪大学・大学院情報科学研究科・教授)

【平成29(2017)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、災害発生時に、都市街区で救助隊や被災者同士が高信頼・高効率に災害情報を伝達・交換できるよう、マイクロモジュールによる情報センシング/集約機構という新しいパラダイムを提案し、かつそのアーキテクチャの一部をプロトタイプで実現し、理論的評価を行うとともに、公開/実証実験を行って有効性を検証するものである。特に、加速度センサーとモバイルカメラを用いた高精度トラッキングによる位置情報ベースの情報共有手段には独創性と有用性が認められる。学術論文発表等も順調に行われており、研究・試作・検証の全てにおいて当初計画されたとおりの成果を上げている。

【令和元(2019)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	災害発生時などの通信インフラが寸断されるような状況を想定した、マイクロモジュールと呼ばれる多数の無線通信機器とスマートフォンを含む多数のセンシング機器の統合による情報のセンシング、集約、共有パラダイムの構築に向けて、綿密な研究計画に基づいて多岐にわたるサブテーマを展開した。その結果、技術要素の開拓から実証実験に至る各レベルで、理論と実践の両面で優れた研究成果を上げている。 研究成果の公表も積極的に行い、国際的な知名度向上も果たしている。今後も、技術要素の普及に努めるとともに、広範な社会実装に向けた取組を期待する。